

自己の感情体験様式と共感性からみる 青年期のアイデンティティについて

大 崎 園 生

キーワード

青年期 Adolescence

対人関係 interpersonal Relationship

感情体験様式 Feelings Experience Style

共感性 Sympathy

アイデンティティ形成 Identity Formation

問 題

Erikson (1959) が青年期の発達的特徴としてアイデンティティ形成の概念化を行って以来、数多くの研究が行われてきている(鑑・宮下・岡本, 1997 参照)。ことに Marcia (1966) のアイデンティティ・ステイタス・アプローチが提唱されてからは、アイデンティティを実証的に研究する方法としてこ

れが受け入れられ数多くの追従研究が行われるようになった。そのなかで、アイデンティティ・ステイタス・アプローチに対する批判として男性と女性のアイデンティティ形成に大きな違いがあることが言われるようになった。すなわち、男性は *intrapersonal* な領域において、女性は *interpersonal* な領域において、アイデンティティが問題になるとされるようになった (Archer, 1992) のである。その後さらに、*interpersonal* な領域が女性のアイデンティティ形成に特有な重要性を持つのではなく、男性のアイデンティティ形成にとっても重要であるという指摘が出るようになる (杉村, 1998)。杉村 (1998) はこうした動向をふまえ、アイデンティティとは世界と自己との関係のあり様そのものであるという発想への転換が必要であるとしている。我が国でも、対人関係の視点からアイデンティティ形成を理解しようとする動向が近年非常に強まっており (岡本, 1999)、石谷 (1994)、金子 (1995)、谷 (1997)、杉村 (2001) などの研究があげられる。

一方、実証的研究ではないものの、心理臨床の経験から無藤 (1999) は、現代に生きる青年のアイデンティティ形成について次のような問題があると指摘している。すなわち、これまでのアイデンティティ形成論は「葛藤や探求する (できる) 自分が青年期にすでに存在している」ことを前提にしていたが、近年では、問題を認識し悩む主体であるはずの「自分」というものが希薄になってきているという印象があるという。そして、「自立的独立的な自己確立の経過は優勢ではなくなっているようだ」と述べ、「自分というものの」の成立について、他者とのかかわりのなかでそれに触発されて自分自身の望みや癖や感情や考えといった諸点に気づき、「自分というもの」を感じとっていくプロセスが想定されるのではないかとしている。このプロセスは相互的に促進されるものであり、「自分」の感覚の基盤が成立するとき、他者についてもそれらを持った存在であるという感覚が生じる、その過程を相互に促進し合う関係を持つかどうか、青年期におけるアイデンティティ形成において重要な問題になるという。

このような「自分というもの」の形成プロセスにおいては、自己の感情に

ついてそれを意識し感じる事が重要になると考えられる。これは自己の感情的体験に対し知的にも情緒的にもしっかりと関わるという、個人の感情体験様式という特性として捉えることができよう。このような感情体験様式については、これまで心理臨床の世界では非常に重要なものとされてきた。

C.Rogers はクライアント中心療法を構築するなかで、心理的に適応的な個人は自己の感情についても抑圧したり否認したりせずに意識のうえで十分にそれを経験していることを示唆している (Rogers,1958)。

感情についてはこれまで様々な方面から様々な手法で研究されているが、個人の主観的感觉としては、対象世界が主体にもたらす意味を確定し、この意味の連続性を通じてそれを感じる主体の一貫性が感覚され、その時間的な継続性を通じて、主体の連続性が感覚されるというように (福井, 1990)、自己が一貫し連続して自己であるという自己感の成立に大きな役割を果たしている。また、感情はそれが強い場合には個人の自律性を脅かす事態にもなるが、そうした事態を経験するなかで、個人が自らの自律性を意識する契機ともなる (濱野, 2002)。感情は個人が世界と関係しながら適応し生きるなかで「自分である」ことを確認する基盤とも言えるものなのである。

アイデンティティについても近年、他者との関係性がアイデンティティや自己そのものについてどのような意味を持つかについて感情の側面から言及がされている。たとえば Fogel (2001) は、「人々は、関係の変化を感情の異なるタイプによって経験し、そのような感情は自己についての情報をもたらす。(中略) アイデンティティは認知もしくは表象ではなく、感情的な経験である。」と述べている。

このように、他者とのかかわりのなかでの感情的体験を、自分のものとして知的情緒的にしっかりと感じとることで「自分というもの」を確かにする営みが、アイデンティティ形成において重要になると考えられるのである。このさい問題になるのは、先に見たような「自己の感情へのかかわり方」すなわち「感情体験様式」である。

感情体験様式について、心理臨床の現場ではない日常的な場面でのあり様

について検討を加えた研究は少ない。日常的場面での感情体験様式を尺度化する試みとして、北出（2001）の「感情体験尺度」をあげることができる。そこでは Rogers の考え方を発展させた Gendlin の「体験過程の様式」の考え方にに基づき、「豊かな感情体験」として、自分の感じ方や内面に注意を向けることができ、それについて豊かに表現しているという特徴をあげている。また感情へのかかわり方に問題があるものとして、「巻き込まれた感情体験」と「閉ざされた感情体験」をあげている。後者は「感じとり味わう」ことから隔たっている体験であり、前者については、その情動に支配されてしまっており、対象化し正しく認識することが困難な体験であると考えられている。

因子分析の結果、尺度は最終的に 3 因子にまとめられ、第 1 因子は「自己の感情に対する統制可能感」、第 2 因子は「自己の感情に対する尊重性」、第 3 因子は「感情の優位性」と命名された。第 1 因子は、自分の感情に巻き込まれずに理解できており、不快な感情でも落ち着いて抱えていられること、感情を上手く表現できることなどから成っており、自己の感情に対し「間」を取って落ち着いて抱えていられる状態を表すとされた。第 2 因子は、自分の内面の気持ちをよく受け止め、それを尊重できることを表すとされた。第 3 因子は、思考に偏ることで感情を過度に抑えないことを表すとされた。

先の無藤（1999）の指摘では、アイデンティティ形成の前提として、「問題を認識し悩み、葛藤する主体」があげられていたが、悩んだり葛藤するためには、自己のうちに生ずる様々な相反する感情を、一方を抑圧することなくともに抱えていられることが必要である。このことから、アイデンティティ形成にとって、自己のどのような感情についても向き合い尊重するとともに、過度にそれに巻き込まれず落ち着いてそれらを抱えながら、現実的な行動を選択していくことが重要であると考えられる。すなわち、北出（2001）が示した 3 つの感情体験様式のあり様すべてが必要であると考えられるのである。

先に述べたように、他者との感情的かかわりのなかでは、他者についても他者固有の感情が存在することを認識することが、自己のそれと平行して起

こると考えられている。他者の感情にどのようにかかわるかについては、これまで共感性の問題として検討されてきた。共感性研究の中でも、発達的变化についてはあまり研究されていないのが現状であるが、Hoffman は共感性の発達を 6 段階にわけるところを提唱している（斎藤，1998 より再引用）。そのなかで、発達的に青年期までには第 6 の段階の水準に達すると考えられている。第 6 段階は「役割取得（role taking）」と呼ばれる。第 5 段階までは感情状態になることが刺激によって引き起こされる自動的な過程であるのに対し、この役割取得では積極的に意識して対象者の身になってみる必要があるとされており、より高度な共感反応は自－他のより洗練された分化が基礎となるとされている。この考え方に従えば、自他の感情について、自己と同時に他者についてもその固有性を意識することは、青年期になって最も発達した共感性があつて可能になることだと考えられる。

このようなもっとも発達した共感性を測定しうる尺度として、角田（1994）の共感経験尺度をあげることができる。角田（1991）は、共感性を「能動的・想像的に他者の立場に身をおき、自己と異なる他者を理解すること」として、尺度構成を行っている。そこで考慮されたのは、情動伝染など受身的な感情反応と区別され、客体の立場に立った理解（視点取得）がなされることであつた。そして、感情を共有する体験（共有経験）と、感情を共有できなかった体験（共有不全経験）の 2 側面からなる共感経験尺度改訂版（EESR）を作成している。

澤田・山口・鈴木・島津・喜納（2001）によれば、自己の感情への積極的態度が他者の感情状態の理解と関連しているという。角田（1994）の共感経験尺度でも私的自己意識との関連が見られていた。したがって、他者の内的状態の認識と、自己の内的状態の認識や態度が一定の関係をもっていると考えられることができる。しかし私的自己意識はあくまで「自己の内部状態に対する注意の程度」を表す概念であり、自己を対象化している側面が強いように思われる。また澤田らの「自己の感情への積極的態度」は、自分の感情への評価的態度を表す項目から成っており、その感情をしっかりと感じ取っている

かどうかまでは考慮されていない。したがってこれらの尺度では、無藤（1999）の言うような「感情や欲求を感じ取っていく」ことまでを含む、自己の感情体験様式を測定しているとは言い難いと考えられる。したがって、今回は北出（2001）の感情体験尺度を用いて、新たに共感性との関連を検討することにする。

本研究では、①アイデンティティ感覚には、3つの感情体験様式の全てが関連する。②肯定的な感情体験様式は、他者の感情を共有できることとできないことの両面と関連する、という仮説を検討していく。

方 法

（1）調査協力者

5つの大学で、大学1～4年生を対象に調査を行った。欠損値を除いた最終的なデータ数は312名分であった（平均年齢19.88,SD=1.33）。そのうち男子は98名（平均年齢19.91,SD=1.41）、女子は213名（平均年齢19.87,SD=1.30）であった。

（2）尺度

1)共感経験尺度：角田（1994）の「共感経験尺度改訂版（EESR）」を用いる。「1：まったくあてはまらない」から「7：とてもよくあてはまる」の7件法で回答が求められた。

2)感情体験尺度：北出（2001）の感情体験尺度（FES）を用いる。17項目からなり、「1：まったくあてはまらない」から「4：とてもあてはまる」の4件法からなる。原版では0～3の4件法であるが、今回の調査では他の尺度との得点の比較を容易にするために、1～4の4件法とした。

3)多次元自我同一性尺度：谷（2001）の作成した多次元自我同一性尺度（MEIS）の20項目を用いる。谷はこれまでの自我同一性尺度の批判的検討

を行い、Erikson の記述から自我同一性にかかわる文章を抽出し、新たに尺度を作成した。Erikson が自我同一性の概念として記述した、「自分自身の斉一性・連続性」「他者に対して自分自身が持つ意味との間で調和がとれているという自信」「自分がどこに向かって行こうとしているかよくわかっている感覚」「自分が理解している社会的現実の中で定義された自我へと発達しつつあるという感覚」の 4 つをそれぞれ測定する下位因子からなる多次元尺度を構成している。回答方法は「1: まったく当てはまらない」から「7: 非常に当てはまる」の 7 件法とした。

(3) 手続き

質問紙はフェイスシート（学校名、所属学部、学年、性別、年齢を問う）、共感経験尺度、感情体験尺度、多次元自我同一性尺度から構成された。調査は平成 14 年 11 月、平成 15 年 8 月に行われ、各大学で講義時間中にいっせいに配布しその場で回収した。

結 果

(1) 共感経験尺度改訂版の結果

EESR の信頼性の分析を行ったところ、 $\alpha = .78$ という値が得られ、信頼性は十分にあるもの判断された。確認のため因子分析を行った結果、角田（1994）と同じく「共有経験」と「共有不全経験」が抽出された。「共有経験」の α 係数は.87、「共有不全経験」の α 係数は.91 となり、十分な信頼性が見られた。

(2) 感情体験尺度の結果

FES の信頼性を求めた結果、 $\alpha = .75$ という値が得られ、信頼性はあるものと判断された。確認のため因子分析を行った結果、北出（2001）とは異なる

る因子構造が得られた。元尺度の因子構造でそれぞれ信頼性係数を求めたところ、「統制可能感」因子で.50以下の低い係数が出たため、今回行なった因子分析の結果を採用することとした。

主因子法・Varimax 回転による解を求め、因子負荷量が|.40|より低い項目（「自分のこころの内面はとても深く豊かだと感じられる」、「自分の欠点やコンプレックスとつき合っていける」）を除いた15の項目が3つの因子に分類された（Table1）。

Table1 感情体験尺度の因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	共通性
自分の気持ちを感じながら、それについて考えたり行動を決めたりする。	.75	.01	.23	.61
自分が本当はどんな気持ちでいるのか理解した上で、何をしたいのか考えようとする。	.67	.12	.16	.49
ふとした瞬間に自分は本当はこう感じているんだなあと思うことがある。	.51	-.16	.22	.33
その時々自分の気持ちを大切にしている。	.43	.05	.38	.33
自分が持っている悩みと落ち着いた気持ちで向き合うことができる。	.41	.36	-.09	.30
人に自分の気持ちをうまく伝えられない。(R)	.08	.70	.11	.50
自分の感じていることが良くわからないことが多い。(R)	.01	.62	-.01	.38
自分が感じていることをいろいろな言葉で言い表せるような気がする。	.21	.51	.27	.38
嫌な出来事があると、自分でもわけのわからない気持ちにおそわれることがある。(R)	-.12	.50	-.37	.40
喜んだり悲しんだりしていても、それが本心からのものではないように感じることもある。(R)	.05	.42	.34	.30
私は自分の本当の気持ちにすぐ近づくことができる。	.31	.41	.35	.38
自分の内面の気持ちにはあまり触れようとは思わない。(R)	.18	.08	.60	.40
嬉しいときには“うれしいなあ”とめいっぱい喜びをかみしめる。	.34	.01	.52	.39
本当に辛く悲しいときにはその気持ちの重みを十分に感じられる。	.16	.00	.48	.26
人に話すときに、自分がどんな気持ちかを話すよりも一般的な話をしていることが多い。(R)	-.04	.06	.45	.21
因子寄与	2.172	2.007	1.894	
因子寄与率(%)	12.77	11.81	11.14	
(R)：反転項目				

第1因子は「自分の気持ちを感じながら、それについて考えたり行動を決めたりする」「自分が本当はどんな気持ちでいるのか理解した上で、何をしたいのか考えようとする」などの項目からなっている。北出（2001）における「自己の感情に対する尊重性」因子に含まれる項目の多くと「自己の感情に対する統制可能感」因子に含まれる項目の一つ（「自分が持っている悩みと落ち着いた気持ちで向き合うことができる」）がまとまって抽出されており、異なる結果が見られた。今回の結果で見られた項目のまとまりは、自分の感情を拒否したり抑圧したりせずに、それを尊重ししっかりと向き合っていること、すなわち日々の生活の中で自分の感情を参照する態度を表していると解釈でき、第1因子は「自己の感情の尊重・直面」因子と命名された。

第2因子は「人に自分の気持ちをうまく伝えられない」「嫌な出来事があると、自分でもわけのわからない気持ちにおそわれることがある」などの項目からなっている。北出（2001）の第I因子「自己の感情に対する統制可能感」に含まれる多くの項目と、第III因子「感情の優位性」に含まれる項目の一つ（「喜んだり悲しんだりしていても、それが本心からのものではないように感じることもある」）がまとまって抽出されており、自己の感情に対し過度に巻き込まれたり離れたりせず適切な間を保って、理解し表現することを表していると考えられる。そこで北出（2001）と同様に第2因子を「自己の感情に対する統制可能感」と命名する。

第3因子は「自分の内面の気持ちにあまり触れようとは思わない」「人に話すときに、自分がどんな気持ちかを話すよりも一般的な話をしていることが多い」などの項目からなっている。北出（2001）における第III因子「感情の優位性」に含まれる項目と第II因子「自己の感情に対する尊重性」に含まれる項目が混在している。これらは思考に偏らず自己の内面に深く接近し、情緒的に味わっていることを表す同じ因子と解釈できる。そこで第3因子を「自己の感情の体験」因子と命名した。

第1因子の α 係数は.70、第2因子の α 係数は.70、第3因子の α 係数は.60となり、ある程度の信頼性が見られた。

(3) 多次元自我同一性尺度の結果

MEIS の信頼性分析を行ったところ、 $\alpha = .92$ という値が得られ、信頼性は十分にあるものと判断された。確認のため因子分析を行った結果、谷 (2001) の因子分析と同様な因子構造が得られた。

第 1 因子は、自分が自分であるという一貫性を持っており、時間的連続性を持っているという「斉一性・連続性」因子である。

第 2 因子は、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなどが明確に意識されている「対自的同一性」因子である。

第 3 因子は、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚を表す「心理社会的同一性」因子である。

第 4 因子は、他者から見られているであろう自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚を表す「対他的同一性」因子である。

各因子の α 係数は .83～.89 であり、ともに十分な信頼性が見られた。

各尺度と下位因子の平均値と標準偏差 (SD) および相関係数を Table2 に示す。

Table 2 各尺度・因子の平均値・標準偏差 (SD) と相関係数

		共有体験	共有不全	感情体験	尊重直面	感受性	統制可能	同一性	斉一連続	対自的	対他的	Mean	SD
共感体験				0.05				-0.09				90.86	11.67
共有体験												48.19	9.06
共有不全		-0.26**										42.68	10.08
感情体験								0.57**				45.91	6.39
尊重直面		0.38**	-0.09									14.40	2.66
体験		0.29**	-0.18**		0.38**							12.21	2.05
統制可能		-0.02	-0.12*		0.26**	0.20**						13.73	3.20
同一性												81.61	19.58
斉一連続		-0.08	-0.03		0.12*	0.15**	0.45**					22.56	6.76
対自的		0.05	-0.17**		0.38**	0.13*	0.50**		0.44**			19.81	6.62
対他的		0.11*	-0.23**		0.22**	0.27**	0.41**		0.63**	0.40**		18.75	5.55
心理社会		0.15**	-0.12*		0.41**	0.16**	0.41**		0.52**	0.59**	0.53**	20.48	5.59

** : $p < .01$, * : $p < .05$

Table3 重回帰分析における各体験様式の標準偏回帰係数

	同一性全体	斉一連続	対自的	対他的	心理社会
尊重直面	.21**	-.02	.30**	.06	.34**
体験	.04	.06	-.07	.17**	-.04
統制可能	.50**	.44**	.44**	.37**	.33**

**: $p < .01$, *: $p < .05$

Table4 感情体験様式各群の平均値

	N	尊重直面	体験	統制可能
体験群	175	16.09	12.96	14.21
疎隔群	81	12.01	10.93	10.81
統制群	55	12.53	11.71	16.49

Table5 感情体験様式による分散分析

	F 値	多重比較
共有体験	17.09**	体験 > 疎隔・統制
共有不全	0.33	N.S.
斉一連続	20.37**	統制 > 体験 > 疎隔
対自的	24.55**	統制・体験 > 疎隔
対他的	16.40**	統制・体験 > 疎隔
心理社会	28.04**	統制・体験 > 疎隔

**: $p < .01$

(4) 感情体験と自我同一性との関連

感情体験の各因子と自我同一性の各因子とのあいだにはそれぞれ関連が見られたが、自我同一性にとって、どのような感情体験のありかたが重要であるかを検討するために、自我同一性を従属変数とし感情体験の各因子を独立変数とした重回帰分析を行った (Table3)。その結果、自我同一性全体では「統制可能感」が最も高い係数を示し (.50), 「尊重・直面」因子が.21 の係数を示したのに対し, 「体験」因子は有意な係数を示さなかった。「対自的同一性」と「心理社会的同一性」でも同様な結果が見出された。一方「斉一性・連続性」因子では「統制可能感」のみ有意な係数が示され (.44), 「対他的同一性」では「体験」(.17) と「統制可能感」(.37) で有意な係数が示された。

(5) 感情体様式の分類

重回帰分析の結果, 「統制可能感」因子が最もアイデンティティに影響力を持っていた。さらにここで, 感情体験のあり方によって共感性およびアイ

デンティティに違いが見られるかどうかを検討するため、感情体験の3因子を基準としたクラスター分析を試みた。予備的に階層法で分類を試み、その結果クラスター数として3が予想された。そこでクラスター数を2～4に設定し分割法によりクラスター分析を行った結果、3クラスターが最も適当と判断された。

第1クラスターは、「尊重・直面」因子と「体験」因子が最も高く、「統制可能感」因子が中程度の群である。この群は、自分の感情に適切な間を保ち言葉で表現するよりも、自分の感情を体験しそれと向き合い、日々の生活の中で大事にしている群であるといえる。そこで第1クラスターは「体験群」と命名することにする。第2クラスターは3因子とも最も低い群であり、自分自身の感情に近づきにくく意識しにくい群であると考えられる。そこで第2クラスターは「疎隔群」と命名する。第3クラスターは、「尊重・直面」因子と「体験」因子に比べ、「統制可能感」因子が高い群である。これは、日々の生活の中で自分の感情を参照したり情緒的に体験することに比べ、自分の感情に適切に間を保ち言葉で表現することのできる群である。すなわち、自分自身の感情であまり揺れてしまうことがなく自己を統制し自分の状態を表現できる群であると考えられる。第3クラスターは「統制群」と命名する。

各群の3因子それぞれの平均値をTable4に示す。

(6) 感情体験様式とアイデンティティおよび共感性との関連

感情体験様式の3群を独立変数とし、共感性の2因子と自我同一性の4因子を従属変数とした一元配置の分散分析を行った(Table5)。その結果、共感性では「共有体験」でのみ有意差が見られ、Tukeyの多重比較の結果、「体験群」が「疎隔群」と「統制群」よりも高くなった。自我同一性では4因子全てに有意差が見られ、Tukeyの多重比較の結果、「対自的同一性」「対他者的同一性」「心理社会的同一性」において「体験群」と「統制群」が「疎隔群」よりも高く、「斉一性・連続性」において、「統制群」>「体験群」>「疎隔群」という結果が見られた。

考 察

(1) 感情体験様式とアイデンティティ

本研究の仮説は、肯定的な自己の感情体験様式がアイデンティティに影響を与えているというものであった。相関係数では、感情体験様式の3因子はそれぞれアイデンティティとの関連を持っていたが、重回帰分析の結果、感情体験様式のなかでも「統制可能感」が最もアイデンティティ感覚に影響を与えていた。このことは、自己の感情と適切な間を保ち、それを理解し表現するという、意識的な主体性を発揮する心的機能が重要であることを示していると考えられる。アイデンティティ形成のプロセスのなかに、探求に対する感情的結果とその評価を組み込むモデル (Grotevant, 1986 ; 高村, 1997) が提唱されているが、自分の感情に向き合い、適切に間を保ち理解し表現するという感情体験様式のあり方は、そのようなアイデンティティ形成プロセスに大きな役割を果たすものと考えられる。

また主体性のあり方を自己の体験との心理的距離から検討した吉良 (2002) は、主体感覚の損なわれた体験として、問題からの心理的距離が近すぎる場合と遠すぎる場合をあげている。自らが自らの生活の主体者であるという主体性の感覚は、アイデンティティ形成という青年期の課題に直面したとき、その問題に対処するための基盤と考えられる。社会の中でどのように生きる道を選ぶか、そのとき自分自身の希望や資質をどのように評価しどのように現実と折り合わせるか。青年期の危機と呼ばれる事態は、そのような悩みや葛藤のなかで現われるものである。そうしたとき、そこで引き起こされる自分の感情に巻き込まれるのでもなく傍観者になるのでもなく、主体として引き受けていくために、「自己の感情に対する統制可能感」が大きな役割を果たすと考えられる。

このことは「対自的同一性」と「心理社会的同一性」において最もよく示されていた。自己が自己自身として今何をしており何をしたいと思っているのかや、社会の中でやっていけるだろうという見通しは、このような感情体

験様式を持つことで可能になっているのであろう。

一方で「斉一性・連続性」の感覚は、「統制可能感」のみに影響を受けていた。これは、どのくらい重きをおいて見るかや、どのくらい深く感じとるかにはかかわりなく、自分の中で起こっている感情を適切に把握し表現できるということが、吉良（2002）の言うように主体意識として自己の連続性や一貫性の感覚を強めているのであろうと考えられる。さらに「対他的同一性」は「体験」と「統制可能感」に影響を受けていた。これは、周囲の出来事に対する自分の感じをしっかりと感じ、かつそれに巻き込まれず間を保ちつつ理解し表現することで、周囲の人との情緒的やりとりがスムーズに行われていることを示唆すると考えられる。自分が何を感じたのか、を他者に対して適切に伝えられることは、自分を他者に理解してもらうための必須条件であらう。

類型による分析では、体験群と統制群で同じくらいアイデンティティが高いという結果が得られた。これは、自己の感情に対し適切な間を取りにくい傾向はあるものの、自己の感情を尊重し味わいながら大切にすることでアイデンティティの感覚を強めている者と、自己の感情を深く感じとり味わうこととはないが、間を保ちつつ適切に理解し表現しうることでアイデンティティの感覚を強めている者の2つのタイプがあることを示すと考えられる。

（2）共感性と感情体験

本研究の仮説では、感情体験様式のあり方は共感性のあり方によって異なるというものであったが、感情体験の分散分析による結果では、「共有体験」でのみ、感情体験様式による違いが見られた。すなわち、他者の感情については「体験群」が最も共有できていた。自己の感情に率直に向き合いそれを実感する者は、他者の感情についてもそれを感じとりやすいと考えられる。このことは、角田（1994）や澤田ら（澤田・山口・鈴木・島津・喜納，2001）の結果と一致する。自分の内面に接近できる者は、他者の内面にも接近ができるということであらう。感情を向き合い尊重し、情緒的な味わいを実感す

るという体験様式は、自己に対してと同じように他者に対しても向けられる態度であると考えられる。

その一方で、自他の感情の固有性を意識するはずの「共有できないこと」は、自己の感情体験様式で違いは見られなかった。したがって、他者とは異なる自分自身の内面を認識することで、自己の感情を理解し感じとり、「自分というもの」を形成するプロセスは明確なものではないと考えられる。

逆に、他者と感情を共有することで自己の感情体験も確認され、それが自己の感情体験の確かさとして感覚されている可能性が考えられる。

(3) アイデンティティ形成の2つのタイプ

このように、他者の感情を共有しやすい「体験群」の者は、その共有の営みを通じて自己の確かさを確認し、アイデンティティ感覚を強めていると考えることが可能なのではないだろうか。「体験群」の者は、他者との感情的な共有関係を通じて、自分が安定して自分であり、社会の中でやっていけるだろうという感じを獲得していると思われる。それは、他者とのつながりに支えられた自己のあり様を示し、関係性におけるアイデンティティ形成を考える上で、内面的な感情レベルでの関係の重要性を示すものであるといえる。

これとの比較で言えば、「統制群」は他者と感情を共有することよりも、自己自身の内面を理解し表現することで自分というものの確認を行なっていく者であると考えられる。このようなあり方は、従来のアイデンティティ形成で前提されていた「問題を認識し悩む主体」がたどるであろう道筋であると思われる。

以上、自己の感情体験様式のあり方から、2つのアイデンティティ形成の可能性が示された。ひとつは自分の感情に向き合い尊重しそれを実感していくことで自己のアイデンティティ感覚を強めていくあり方である。これには他者との感情的つながりの感覚が関連しており、他者の感情を共有することで自己の感情体験のあり方も確認され、自分自身のあり様として確かなものとして定着していくプロセスが考えられる。もう一つは、自分の感情体験を、

意識的に理解し表現していくことでアイデンティティ感覚を強めていくあり方である。これは、周囲の現実に向き合うなかで自分の感じるところを理解しそれを表現することで、自分自身のあり様を確認し現実はどう関わるかの選択肢を自分なりに考え出していくプロセスとして、理解することが可能であると考えられる。

今後は、青年期の中でこうした感情体験様式がどのようにして形成されてくるのかが検討されていく必要があるであろう。

参考文献

- Archer, S. L. 1992 A Feminist's Approach to Identity Research. In G. R. Adams, T. P. Gullotta, & R. Montemayer(Eds.), *Advances in Adolescent Development : Vol. 4. Adolescent Identity Formation* (Pp. 91-121) . Newbury Park, CA : Sage.
- Erikson, E.H. 1959 Identity and life cycle. New York :W. W. Norton.
- Fogel, A. 2001 A relational perspective on the development of self and emotion In H.A.Bosma & E.S.Kunnen(Eds.), *Identity and Emotion Development through Self-Organization* (Pp.93-114). Cambridge UP.
- Grotevant,H.D.1986 Toward a process model of identity formation. *Journal of Adolescent Research*, **2**, 203-222.
- 濱野清志 2002 心理臨床における感情 高橋雅延・谷口高士（編著） 感情と心理学 発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開 北大路書房 Pp.192-203.
- 福井康之 1990 感情の心理学 自分とひととの関係性を知る手がかり 川島書店.
- 石谷真一 1994 男子大学生における同一性形成と対人的関係性 教育心理学研究, **42**, 118-128.
- 角田 豊 1991 共感経験尺度の作成 京都大学教育学部紀要, **37**, 248-258.
- 角田 豊 1994 共感経験尺度改訂版（EESR）の作成と共感性の類型化の試み 教

育心理学研究, **42**, 193-200.

金子俊子 1995 青年期における他者との関係のしかたと自己同一性 発達心理学研究, **6**, 41-47.

吉良安之 2002 主体感覚とその賦活化 一体験過程療法からの出発と展開—九州大学出版会.

北出 薫 2001 自己の感情への関わり方について —イラショナル・ビリーフとの関連から— 静岡大学人文学部人文社会科学研究科修士論文 (未公刊).

Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.

無籐清子 青年期とアイデンティティ 「自分」を, そして「ひと」を, 確かに感じとること 鑪幹八郎・山下 格(編著) アイデンティティ 日本評論社 Pp.49-60.

岡本祐子 1999 アイデンティティ 日本児童研究所(編) 児童心理学の進歩(1999年版), Vol.38. 金子書房 Pp.187-211.

Rogers, C.R. 1958 A process conception of psychotherapy *American Psychologist*, **13**, 142-149.

齋藤耕二 1998 青年期における共感性の発達 (2) 白百合女子大学研究紀要, **34**, 173-186.

澤田瑞也・山口昌澄・鈴木求実子・島津由美・喜納歩美 2001 共感性と自己の感情に対する態度との関係 (1) 神戸大学発達科学部研究紀要, **9**, 1-8.

杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, **9**, 45-55.

杉村和美 2001 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2年間の変化とその要因 発達心理学研究, **12**, 87-98.

高村和代 1997 課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて 教育心理学研究, **45**, 243-253.

谷 冬彦 1997 青年期における自我同一性と対人恐怖的心性 教育心理学研究, **45**, 254-262.

谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造 一多次元自我同一性尺度

(MEIS) の作成— 教育心理学研究, **49**, 265-273.

鑑幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ —1987
～1991年— ナカニシヤ出版. ます